

まどみちお

童謡「ぞうさん」 差異と肯定と誇りと

★まど・みちおさんの「ぞうさん」作詞の想いは、創作から約三十年後に初めて明らかにされました。

『童謡はどんな受けとり方をされてもいいのだが、その歌が受け取ってもらいたがっているように受け取ってほしい。たぶんこういう風に受け取ってもらいたがっている、というのはあります。詩人の吉野弘さんの解釈が、それに一番近かった。吉野さんは、「お鼻が長いのね」を、悪口として言っているように解釈されています。私のはもっと積極的で、ゾウがそれを「悪口」と受けとるのが当然、という考えです。』（「まどさん」 阪田寛夫著 新潮社）

「鼻が長いね」と悪口を言われた時に「一番好きな母さんも長いのよ」と誇りを持って返したという訳です。

★阪田寛夫さんはまどさんの言葉に非常に驚き理解し難かったようです。吉野弘さんはこう述べていました。
(吉野弘『現代詩入門』青土社)

多くの人々に愛唱されている、この傑作の中で私が感嘆するのは「そうよ/かあさんも 長いのよ」という箇所である。この詩に関して、少しばかり変わった読み方をすることを許していただくと、冒頭の「ぞうさん/ぞうさん/おはなが ながいのね」は、象の鼻の長すぎることを、いくらかからかった者の意地悪と読めないこともない。ところが、そういう意地悪をすら「そうよ/かあさんも ながいのよ」が、見事に肩すかしを食わせるのである。得意になって答える子象に、意地悪なからかいも、微笑して同調せざるを得なくなる。

★鶴見正夫さんは…

(鶴見正夫『童謡のある風景』小学館)

自然や人や動物や物のすべてを通して、そこに在る永遠不変の根源的な声が聞こえる。それはもう当たり前なのが当たり前のことではなくなっていることに私は感動するのだ。しかも感動しながらつい微笑んでしまう。子どもの頃に、太った子が、「でぶ、でぶ、百貫でぶ」と友だちにからかわれていた姿を思いだし、「そうよ、かあさんも」と胸をはって言わせてやりたい気がしてくる。

★三十すぎの一般女性は次のように語ります。(阪田寛夫「遠近法」『戦友 歌につながる十の短編』文芸春秋)

自分も子供の頃「ぞうさん」は悪口の歌だと思っていた。小学校に入ったばかりの頃、みんなから髪が赤い、言うことが変わっていると、ひどく嗤われた。その時「ぞうさん」の象の子ども流に、母親も同じように変わり者と言われていた人間だったから、その娘なんだからと自分を元気づけた。

多くの人々が「ぞうさん」は母子の愛情に満ちた優しさと温かみのある歌と感じ、口ずさんできたと思います。阪田さんの驚きは私達にも共通するものがあります。しかし、上記のように違う受け止め方があるという事実は、この歌は多様で奥深いことを示しています。

「おはなが ながいね」

酒田富治の依頼で葉書に書いた6篇の幼児童謡の一つが「ぞうさん」。疲労困憊の中で推敲するゆとりもなく、心にある叫びがそのまま詩に… 当初、酒田による2拍子の元気なメロディーが付けられました。これを聴いたまどの友人で「いぬのおまわりさん」の作詞者、佐藤義美が内緒でNHKラジオの幼児番組制作担当者に持ち込み、團伊玖磨の手により今のゆったりした3拍子の曲が生まれたのです。その際、佐藤は何と「おはながながいね」に無断で「の」を入れました。佐藤が「の」を入れた理由は、①リズムに乗りやすい ②親しまれやすい からと推察します。「の」を入れると「ながいのね」という柔らかで幼い口調になる上に「そうよ かあさんもながいのよ」と対応する形となってきます。問答において「の」が対応すると、問う他者と答える子象に繋がりが生まれます。「の」を入れたことにより、まどが詞にこめた深い想いとは大きなズレが生じてしまったのです。まどは「(私の)リズムが佐藤さんの趣味に合わなかったのでは」と述べています。原作者の想いから離れてしまった「ぞうさん」ですが、子ども達には大人風の解釈を加えず、感じるまま素直に歌わせるのがいいと私は思います。まどさんも「童謡はどんな受けとり方をされてもいい」と言っておられます。

百歳日記

(まど・みちお『百歳日記』NHK出版)

涙はどんどん出るもんです。それはそれは悲しくて、二、三日は泣いておったと思います。

(中略) じいさんは私を目に入れても痛くないほどかわいがってくれましたが、いるべき両親がいないことをバカにするやつも友だちの中におるんです。(中略) そのころは寂しかった。ほかの友だちにはみんなお母さんがいるのに、自分にはいないというのは、本当に悲しいことでした。

ただ自分には母親がいないというだけではない。まどが6歳の時に母はまど一人を祖父の元に残し、兄と妹を連れて父のいる台湾へ移ってしまった。百歳になってもその時のことが忘れられない…

逃風

(まど・みちお「幼年遅日抄 逃風」『文藝臺灣』)

しかしふと私たちは、手のつけられない障碍に出逢つてみた。その障碍は何であつたらう。私には、かなしい海のやうなものの前に立つて、遠くひくく薄れてゆく風を見守つた記憶が鮮明である。風といつしよに、空さへ遠のいて行くやうであつた。私たちだけを、おいてきぼりにして、世界中が流れ去つてゆくやうであつた。私たちは胸に、熱いものを堪へて、一やうに遠い空へ頸をかしげてみた。

10歳の時にまどが台湾の家族の元へ行くまでの4年間の体験は消し難い心の疎外感をまどに与えた。

自我形成

(河合隼雄『大人になることのむずかしさ 子どもと教育』岩波書店)

日本人はその自我をつくりあげてゆくときに、西洋人とは異なり、はっきりと自分を他に対して屹立しうる形をつくりあげるのではなく、むしろ、自分を他の存在のなかに隠し、他を受け容れつつ、なおかつ、自分の存在をなくしてしまわない、という複雑な過程を経て来なくてはならない。

「そうよ かあさんも ながいのよ」そうよ…他を受け容れつつ ながいのよ…自分の存在をなくさない

「ぞうさん」が時世を超え愛される理由は、日本人のアイデンティティ、心の故郷に重なるから。

まどみちおの言葉や作品に見る 深く激しい想いと…

まどさんの心底にある想い…私には想像し難いですが、「ぞうさん」は「(あらゆる)いのちの尊厳」と「包容する母性」を含み、限りない幅広さと奥深さを持った歌であることはわかります。

「大人が本気で書いたものには、そこに人間の本物が出ていて、たとえ子どもにはアピールしなくても大人にはアピールするはず」「児童文学の第一条件はまず大人が感動できるかどうか」「児童の一步前を歩む」「子どもに理解できず無駄と思える大人の人生観世界観による感動が、子どもの心の無意識面に何らかの影響を及ぼさないはずはない」…まどさんの世界や作品には、大人・子どもの区別なく、人・動植物・物の差別なく、生きとし生けるもの、あるいは存在するもの全てへの熱い眼差しが注がれています。そしてそこには、「幼少期の苦い体験」や「戦意高揚の戦争協力詩を書いたことへの陰鬱」が反映されているのでしょうか。「ぞうさん ぞうさん おはながながいのね…」無邪気で温かに聞こえる童謡にも、辛く複雑な想いや生き様が隠されているのです。

参考文献 ★本原稿は「ぞうさん」とまど・みちおの思い (張ソンヒ Hosei University Repository) のレポートをも

とに、各作家の論評を紹介しています。

★Wikipediaの各項目